〈幼児教育〉

協同しながら、一人一人のよさを発揮するための保育活動

～発達や時期に即した遊びや活動を通して～

うるま市立天願幼稚園　教諭　渡口　真央

Ⅰ　テーマ設定の理由

今年度改訂された新幼稚園教育要領では、これまで通り「環境を通して行う教育」を基本としつつ、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育って欲しい１０の姿」が新たに示された。小学校以降の発達を見通しながら、幼児の発達や時期に即した遊びや活動を展開することが求められていると考えられる。その中でも１０の姿の協同性においては、「教師との信頼関係を基盤に友達との関わりを深め、一緒に活動する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わう中で育まれることが大切」であると示されている。幼児期に育まれた協同性は、小学校における学級での集団生活の中で自分の力を発揮し、教師や友達と協力する姿へつながっていくと示されている。

５月に本学級で人との関わりに関する家庭調査アンケートを実施した。調査結果によると兄弟で遊ぶことが多く、一人で遊ぶ子は少ない。遊びの内容としては、ブロックやままごと、ゲームなど室内遊びが多いことが分かった。その反面、幼児が公園で遊ぶ機会が減り、地域の子供と関わることが少なくなっていると考えられる。そのため、幼稚園生活において同年代の友達と関わって遊ぶ経験を積み重ねることにより気持ちを伝え合い、協力して活動に取り組むことが必要だと考える。

本学級の幼児は、保育経験のある子が多く、明るく活発で様々な活動に前向きに取り組む。戸外では固定遊具や鬼ごっこなど体を動かすことが好きな子が多い。室内では製作活動が盛んで、自分がイメージしたものを作ることが得意である。一方、自分の思いを相手に伝えたり、聞いたりすることが少ないため、遊びが深まらない。

これまでの実践をふり返ると、活動を進めることを優先にし、幼児同士の会話のやりとりを見逃したり、時間に焦りを感じてしまい必要以上な援助をしたりしていたように思える。また、友達との関わりが深まらないため、幼児同士で遊び込む楽しさを味わえず一人一人のよさを発揮できる機会を失わせていたのではないかと考える。

そこで、本研究では、発達や時期に即した遊びや活動を通して、幼児理解を行い協同しながら、一人一人のよさを発揮するための援助の工夫を図りたい。そのために、教師が幼児同士をつなぐ橋渡しをすることで、互いに思いを伝え合い、工夫したり考えたりする楽しさを味わえるように援助する。また、幼児同士のイメージを共有する話し合い活動を取り入れたり、自分の気持ちを調整し折り合いをつけたりするための援助をすることで「協同しながら、一人一人のよさを発揮することができる」であろうと考え、本テーマを設定した。なお、本市幼稚園具体的実践３項目と「幼児期に育って欲しい１０の姿」を念頭に置き本研究を進めていきたい。

Ⅱ　研究目標

発達や時期に即した遊びや活動を通して、「１０の姿の協同性」の視点から幼児理解を行い協同しながら、一人一人のよさを発揮するための援助の工夫を図る。

Ⅲ　研究仮説

１　基本仮説

発達や時期に即した遊びや活動の場において、「１０の姿の協同性」の視点から幼児理解を行い、友達と工夫したり考えたりして遊びを進めるための援助をすることで、協同しながら、一人一人のよさを発揮することができるであろう。

２　具体仮説

(1) 共通の目的の実現に向けて遊ぶ中で、教師が一人一人の育ちを読み取り、育って欲しい点とその子に応じた援助の工夫を図り、さらに、幼児同士をつなぐ橋渡しをすることで、自分の思いを伝え、相手の考えを聞き、工夫したり、考えたりする楽しさを味わい協同して遊ぶようになるであろう。

(2) 学級での活動を通して、教師が幼児同士のイメージの共有を図る話し合い活動を取り入れたり、自分の気持ちを調整し折り合いをつけたりするための援助の工夫をすることで、協同して遊ぶことができるであろう。

Ⅳ　研究の全体構想図

今日的教育課題
▲核家族化・共働き家族の増加
▲遊び場・遊ぶ相手の減少
▲小学校との接続

幼児の実態
○進んで遊びに取り組む子が多く活発である。
○製作遊びが盛んである。
▲自分の思いを伝えることが苦手である。
▲製作遊びが得意だが、友達と共通の物を作って遊ぶ事が少ない。

めざす幼児像
◎友達と一緒に工夫したり考えたりしながら協同して遊ぶ子
◎友達と一緒に遊びや活動を進める中で、自分の力を発揮しながら、互いに認め合える子

研究テーマ
協同しながら、一人一人のよさを発揮するための保育活動
～発達や時期に即した遊びや活動を通して～

研究仮説
発達や時期に即した遊びや活動の場において、「１０の姿の協同性」の視点から幼児理解を行い、友達と工夫したり考えたりして遊びを進めるための援助をすることで、協同しながら、一人一人のよさを発揮することができるであろう。

具体仮説(1)
共通の目的の実現に向けて遊ぶ中で、教師が一人一人の育ちを読み取り、育って欲しい点とその子に応じた援助の工夫を図り、さらに、幼児同士をつなぐ橋渡しをすることで、自分の思いを伝え、相手の考えを聞き工夫したり、考えたりする楽しさを味わい協同して遊ぶようになるであろう。

具体仮説(2)
学級での活動を通して、教師が幼児同士のイメージの共有を図る話し合い活動を取り入れたり、自分の気持ちを調整し折り合いをつけたりするための援助の工夫をすることで、協同して遊ぶことができるであろう。

本研究の進め方のイメージ

理論研究
・協同して遊ぶとは
・協同性を育む視点
・協同性が育まれるプロセス
・協同性を育むための援助
・よさを発揮するとは
・年間カリキュラム作成

実践研究
・検証保育
・各幼稚園と保護者へのアンケート実施
・具体的幼稚園実践３項目

協同性が育まれる過程
①教師が幼児一人一人と信頼関係を作る
②友達と遊ぶ楽しさを味わう
③互いの思いの伝え合い
④工夫したり、考えたりする
⑤共通の目的が実現する喜びを味わう

教師の援助
①心のよりどころとなる存在。
②他児の存在に気付き、互いのよさに気付く援助。
③互いの思いを伝え合える援助。工夫したり、考えたりできるような声かけや見守り。
④トラブルや葛藤体験を乗り越えていく過程を大切にする援助。自己発揮できる援助。

環境構成
①安心して園生活を送るための雰囲気作り、場作り。
②興味や関心に応じた環境構成。
③時間と場の保障。教材や材料の用意。
④共通のイメージを共有する場や話し合い活動の設定。

一人一人がよさを発揮しながら協同して遊ぶ

研究のまとめ、研究の成果と今後の課題

Ⅴ　理論研究

1　テーマと新幼稚園教育要領との関連

(1) 新幼稚園教育要領の改訂ポイント

今回改訂された新幼稚園教育要領では、「小学校以降の子供の発達を見通しながら教育活動を展開し，幼稚園教育において育みたい資質・能力を育むことが大切である。幼児期の資質・能力は，「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の３つの視点で示された。また，「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿は，幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより，幼稚園教育において育みたい資質･能力が育まれている幼児の具体的な姿であり，特に５歳児後半に見られるようになる姿である。」と示されている。これらを通して環境と関わって生み出した活動の中で、幼児が経験して学んでいることを把握し、次の環境構成を考え、幼児一人一人の発達を保障していくこと。すなわち、教師には、幼児一人一人の発達や学びの連続性を確保して、次につないでいくことが必要である。カリキュラム・マネジメントを通して、「環境を通して行う教育」を基本としつつ、指導する際にこれらを意識して保育することが重要である（図 1)。

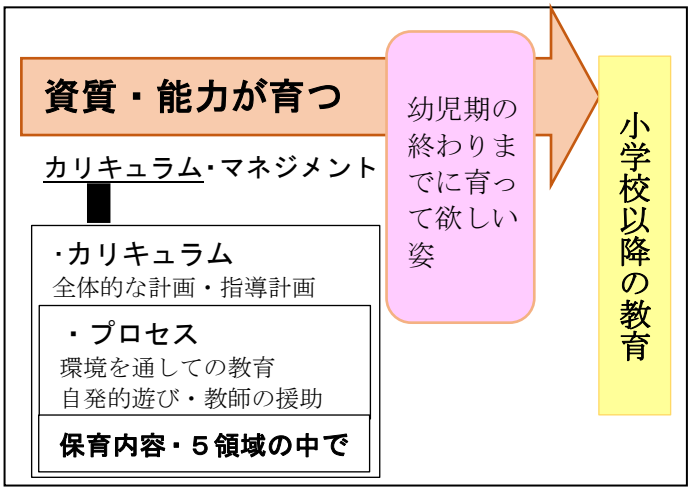


図１　幼児教育の構造（無藤 2018）

幼稚園における PDCA サイクルは、幼児が自発的に遊びに取り組む姿から、「何に興味をもっているのか」「何を楽しんでいるのか」「何が育っているのか」を捉え幼児理解をする。そして、幼児の発達に必要な経験を得るための援助や環境構成を図り、計画・実践・省察を展開する（図２)。そこから、評価をしていく。幼稚園の評価とは「幼児を他の幼児と比較して優劣をつけて設定することではない。保育の中で幼児の姿がどのように変容しているかを捉えながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手がかりをもとめることが評価である」（ぎょうせい）日々の保育の中でこれらを繰り返すことで、協同しながら、一人一人のよさを発揮するであろう。

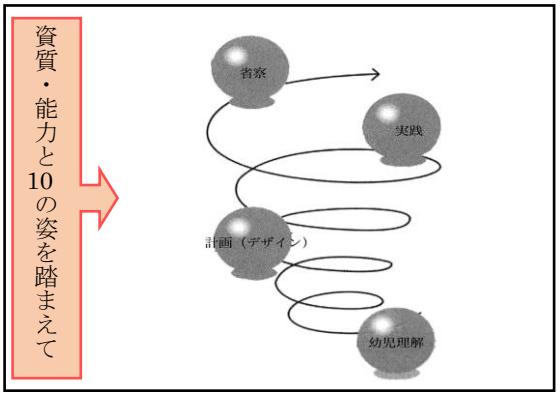


図２　幼児理解・計画・実践･省察の循環モデル（小田・中坪 2009）

2　協同性について

(1) 本研究における「協同性」の定義

無藤(2008)によると、「「協同性」とは、単に子どもが一緒に遊んだり、活動したりすることではなく、共通の目的に向かって話し合い、協力し、ときにぶつかったりしながら、人と深くかかわる力を身に付けていくことです。このように、友達同士がかかわりながら共通の目的を見いだし、実現を試みながら、協力の仕方を体験し学んでいく。」と述べている。これをもとに、本研究では幼児の「協同性」を、友達同士で互いの思いや考えを伝え、いざこざや葛藤体験を繰り返し、一緒に工夫したり、考えたりすることで一人一人のよさ（得意なこと）を生かしながら、協力し合える関係と捉える。

(2) 協同性の育ち

「幼児期から児童期への教育」（国立教育施策研究所2005）において、「幼児が友達を意識し、友達の存在を感じるようになる。そのことがすでに協同性の始まりである。一緒に遊ぶ相手がいることが、幼児の探究心を高め創意工夫の努力を継続させ、新しい発想を生み出す。そして、協同で遊ぶことにより、幼児は協同の仕方を身につける。」と示されている。協同性の育ちは、幼児が様々な環境との相互関係の中で遊びの課題を見いだし、自発的に遊びに取り組むことが大切であると考える。自発的に取り組み、自己課題を解決する中で、欲求が高まり次の意欲へとつながる。そして、友達と一緒に遊びや活動を通して、自己発揮しながら互いのよさを認め合う関係ができてくることが大切と捉える。

(3) 協同性を育む教師の視点

協同性は、友達と一緒にすることを急ぎすぎず、ものとじっくり関わることや自分の遊びを充実させることが基盤として大切であると考える。その中で、友達への親しみや関心の芽生えを捉えて、幼児同士の関わりが広がり深まるような、遊びや学級活動を提案していくことも、教師には求められていると考える。評価ついて無藤(2017)では、「幼児理解に基づいた評価とは、本来主観的なものでありますが、その主観を磨きながら、妥当性と信頼性を高めていくことが必要です（中略)他の職員との話し合いの場を設けたり、常に自分の見方や考え方を客観視する努力が必要です。」と述べている。そこで、幼児の協同性を育む指導を考える上で、教師が協同性を捉える視点を明確にすることが重要だと考える。本研究では、新幼稚園教育要領の１０の姿（３)「協同性」をもとに、図３の「協同性を育む視点」を作成した。この視点をもとに、一人一人の幼児と直接触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを読み取りかつ受け止め、その幼児のよさや可能性など理解し、幼児理解を図っていく。

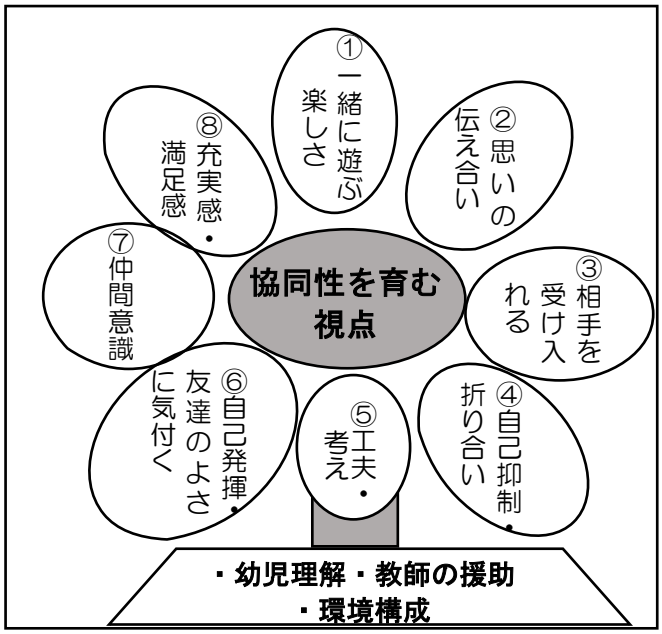


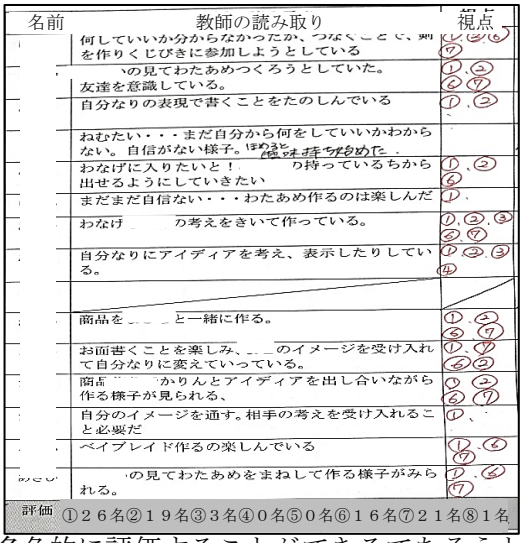
図３　協同性を育む視点

①友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。　②自分の思いを伝え、相手の話を聞く。
③互いの意見が違うことに気付き、受け入れる。　④自分の気持ちを調整して折り合いをつける。
⑤友達と一緒に工夫したり、考えたりする。　⑥自分の力を発揮し、友達のよさに気付く。
⑦一人ではできないことも友達と一緒ならできる楽しさを味わう。
⑧共通の目的が実現する充実感や満足感を味わう。

(4) 保育記録「つなぎ愛シート」の作成

「保育の現場で暗黙知や経験値として積み重ねてきたことを，可視化，言語化し，保育者が意識することで，遊びにおける一人ひとりの気づきの違いに対応し，育ちに寄り添えるようになります。」と大方氏は述べている。保育を振り返り、記録することで保育中には気付かなかったことや無意識でやっていたことに改めて気付くことができると考える。そこで本研究では、一人一人の育ちを読み取り、興味関心を捉える手立てとして「つなぎ愛シート」（表１）を作成した。協同性を育む視点をもとに、「つなぎ愛シート」に日々の保育を記録し整理する。これらをもとに、一人一人の育ちと学級全体の育ちを分析し反省、評価を繰り返すことで、計画や意図的な環境構成、一人一人に応じた援助が図れるであろう。また、このシートを用いて保育反省等で他の教師と話し合うことにより、自分一人では気付かなかった幼児の姿や自分の保育の課題などを振り返り、多角的に評価することができるであろうと考える。

表１　つなぎ愛シート



名前	教師の読み取り	視点
	何していいか分からなかったが、つなぐことで、興を作りくじびきに参加しようとしている	①②⑦
	の見てわたあめつくろうとしていた。	①、②
	友達を意識している。	⑥⑦
	自分なりの表現で書くことをたのしんでいる	①、②
	ねむたい・・・まだ自分から何をしていいかわからない。自信がない様子。ぼわぼと興味持ちはじめた。	
	わなげに入りたいと！　り持っているちから出せるようにしていきたい	①、②⑥
	まだまだ自信ない・・・わたあめ作るのは楽しんだ	①
	わなげ　り考えをきいて作っている。	①、②、③⑥⑦
	自分なりにアイディアを考え、表示したりしている。	①②③④
	商品を　と一緒に作る。	①、②③⑦
	お面書くことを楽しみ、　のイメージを受け入れて自分なりに変えていっている。	①、⑦⑥②
	商品　かりんとアイディアを出し合いながら作る様子が見られる、	①、②③⑦
	自分のイメージを通す。相手の考えを受け入れること必要だ	①
	ペイプレイド作るの楽しんでいる	①、⑥⑦
	の見てわたあめをまねして作る様子がみられる。	①、⑥⑦
評価	①２６名②１９名③３名④０名⑤０名⑥１６名⑦２１名⑧１名	

(5) 協同性が育まれるプロセス

協同する遊びや活動は、初めから目的がありそこへ向かうのではなく、子どもの「～したい」という思いや強い動機を育て、やがてクラス全体の大きな目的へと発展させていくものと考える。そのため、教師は、幼児を大きな目的に向かって「協同的」に活動させるのではなく、幼児の内的動機から活動を展開させていくことが求められている。

無藤(2018)は、「「協同性」は５領域すべてに関わっているが、その中でも特に「人間関係」に関わる子どもの育ちによる姿であると言える。「人間関係」は、（２）「自立心」を基盤にしつつ、子どもが人と関わる力を、とりわけ子ども同士が遊ぶ過程で培い、（４）「道徳性・規範意識の芽生え」をもたらし、（５）「社会生活との関わり」にもつながっていくことが見て取れる。したがって協同性は、子どもの遊びが展開するプロセスに立ち現れることになる。」と述べている。このように協同性が育まれるためには、プロセスが肝心であり、すぐ身につくものではない。発達や時期に合った遊びや活動を通して、繰り返し行うことで協同性が育まれることを理解することが大切であると捉える。

無藤(2018)が述べたように、協同性は単独で育つのではなく、様々な学びを通して育まれていく。下記の図４は、協同性が育まれる過程でどのような「１０の姿」が関連して育っているかを示したものである。

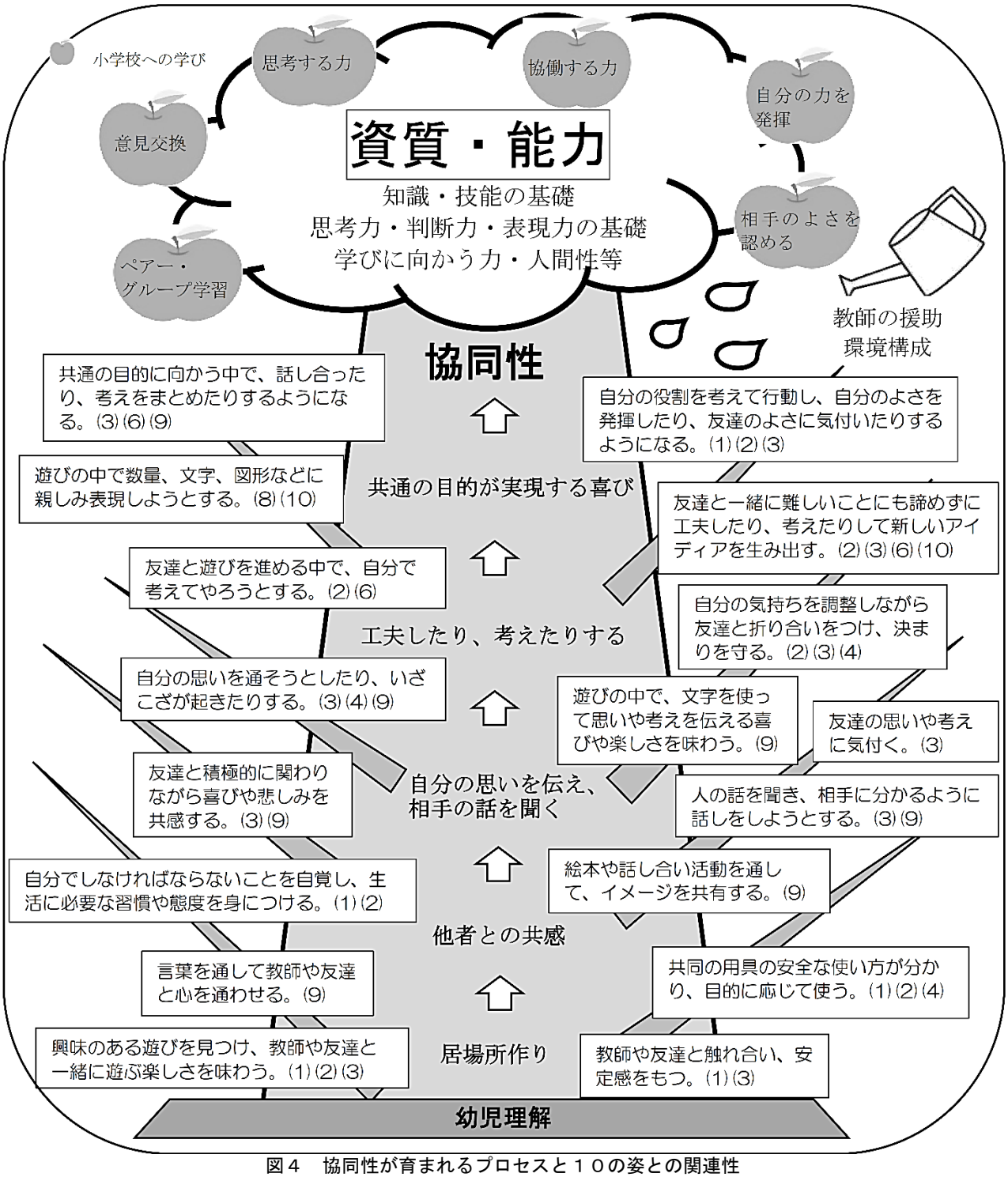


図４　協同性が育まれるプロセスと１０の姿との関連性

(6) 協同性を育むための教師の援助

幼稚園における教師の援助の役割は極めて大きい。「環境を通して行う教育」としてあるが、そこには、人、もの、空間全てが含まれている。協同しながら幼児一人一人のよさを発揮するために、教師は幼児理解に基づき、環境を計画的に構成し、直接援助すると同時に、幼児にとって重要な環境の一つであることを念頭に置く必要があると考える。そこで、協同性を育む視点と協同性を育むプロセスから教師の援助について下記のようにまとめた。

①幼児一人一人のありのままの姿を受け入れよう。

教師は、幼児が居場所を確保できるように好きな遊びや環境を整え、幼児一人一人の気持ちを受け止め寄り添いながら気持ちを切り替えられるようにしていくことが大切である。

②友達と遊ぶ楽しさを味わえるように。

幼児は友達と同じ場所、もの、ことを共有することによって「一緒」という感情を味わったり、共感したりしていく。教師は幼児同士をつなぐ橋渡しの役割を担うことが重要である。

③教師は仲介人。

幼児が思う存分自分を出し切り他の幼児に関わっていく援助が必要である。言葉足らずな幼児や上手く気持ちを伝えられない幼児が自分の気持ちを出せるように思いを汲み取ったり、代弁したりすることが大切である。

④トラブルは友達関係が深まる鍵。

自分が考えていることと他者が考えていることの違いは、トラブルの経験を通して理解される。この経験により、他者との関係を築くために自己主張と自己抑制のバランスを学んでいく。教師は、トラブルを回避するのではなく、自分達の力で問題解決できるように丁寧な関わりを繰り返し行うことが大切である。

⑤教師は遊びのアドバイザー。

幼児が何かやろうとしている過程で、うまくいかずにくじけそうになることもある。教師は、幼児の表情や仕草、体の動きから幼児の気持ちを読み取り、見通しが持てるように共に考えたり、やり方を知らせて励ましたりしながら、自分の力でやり遂げることができるように幼児の心に寄り添いながら支えることが大切である。また、やり遂げた達成感を共に喜び言葉にして伝えることも大切である。

3　小学校との学びの連続性

協同性を育む中で、互いの思いを伝え合い、受け入れ「こうしよう」「ああしよう」と考え直したり、新しい考えを生み出したりする喜びを味わうことで自分の考えをよりよいものとする。無藤(2018)は、「(６)「思考力の芽生え」に結びつき、「主体的・対話的で深い学び」が実現されていく過程と重なる。」と述べている。さらに、小学校の生活科の目標においては、「(３) 自分自身を見つけることを通して，自分の生活や成長，身近な人々の支えについて考えることができ，自分のよさや可能性に気付き，意欲と自信もって生活するようにする。」と記載されている。このように、幼児期で育まれた協同性を通して、「友達と一緒にやる」ことで、一人でできないことも友達とならできる、もっと大きくてすてきなことを実現できることが分かってくる。この経験から難しいことにも挑戦する気持ち（心情)、粘り強くやり遂げようとする（意欲)、友達と協力しながら頑張る姿（態度）が身につく。幼児期における資質・能力や１０の姿が相互に関連し合い育まれることにより、小学校における資質・能力へとつながり充実した学びをもたらすであろう。また、一人一人のよさや可能性を生かし、自分らしさを自覚することでよりよく成長していくことができるという自己肯定感を持つ。そして、自分のよさを生かすことで自分への信頼を高め、他者を信頼し、充実した学び合いをもたらすと考える。下記の表１は、１０の姿から協同性の育ちとの関連性を示し、小学校への学びの連続性を具体化したものである。(2017. 兵庫県教育委員会より、一部加筆修正)

表２　１０の姿から協同性との関連性・小学校への学びの連続性を具体化した表

１０の姿	協同性との関連性	小学校への学びの連続性
①健康な心と体	＊教師や友達と触れ合い、安定感をもって行動するようになる。 ＊遊びを進めるために、必要なものを考えるようになる。（見通しをもつ） ＊いろいろな遊びの中で、目標をもって取り組み、根気強くやり抜くようになる。 ＊遊びの目的に沿って、時間を上手く使ったり、場所を選んだりして自分たちで遊びを進めていく。 ＊製作する際に、様々な用具の安全な使い方が分かるようになる。	＊時間割を含めた生活の流れが分かる。 ＊次の活動を考えて準備する。 ＊安全に気をつけて材料や用具を使う。
②自立心	＊自分の力でやろうとする気持ちをもつ。 ＊一人ではできないことも、教師や友達の力を借りて最後までやり抜こうとする。 ＊難しいことでもどうしたらできるか考えて工夫したり、友達のやり方を聞いて試したりして諦めずに取り組もうとする。	＊「自分にはできる」と積極的に新たなことに取り組む。 ＊生活や学習での課題を自分なりに考え、分からないことや難しいことは教師や友達に聞きながら粘り強く取り組む。
③協同性	＊友達と関わりながら「楽しい」「嬉しい」「悲しい」「悔しい」など様々な感情を共感する。 ＊友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりする。 ＊自分の思いを通そうとしてトラブルが生じる。 ＊相手の考えを受け入れ、折り合いをつけようとする。 ＊同じ目的に向かって工夫したり、考えたりして遊びを進める楽しさやよりよいアイディアを生み出すことの面白さを感じる。 ＊自分の力を発揮し、友達に認められる体験を通して自信をもって行動するようになる。	＊集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力する。 ＊様々な意見を交わす中で新しい考えを出し合いながら工夫する。 ＊友達と協力して生活したり学びあったりする。
④道徳性・規範意識の芽生え	＊友達と関わる中で、自分の感情や意思を表現しながら、自己主張のぶつかり合いによる葛藤を通して互いに理解し合うようになる。 ＊より遊びが楽しくなるようにルールを考えたり、守ることの必要性に気付いたりする。 ＊自分の行動を振り返ったり、気持ちを切り替えたりする。	＊生活や学習において、規律を守る。 ＊相手の気持ちを考えたり、自分の振る舞いを振り返ったりする。
⑤社会生活との関わり	＊自分が知っていることを遊びや生活に取り入れようとする。 ＊関心のあることについてより詳しく知りたいと思ったり、本物らしくしたいと考えて工夫したりする中で、身近にあるものから情報を取り入れようとする。 ＊人の役に立つ喜びを感じるようになる。	＊関心のあることについての情報に気付いて積極的に取り入れる。 ＊地域への親しみから地域のことを学ぶ意欲へもつながっていく。
⑥思考力の芽生え	＊身近な素材や材料を使うことで、物の性質や仕組みなど感じ取ったり、気付いたりする。 ＊生活や遊びを通して、不思議さや面白さを感じ、「こうしてみたい」「もっとやりたい」と思うようになる。 ＊友達の考えに触れる中で、自分とは異なる考えがあることに気付き、考え直したり、新しい考えを生み出したりする喜びを味わう。	＊小学校生活で出合う新しい環境や教科書の学習に興味や関心をもって主体的に関わることにつながる。 ＊問題を解決する際に、探究心を持って考えたり試したりする態度へとつながる。
⑦自然との関わり・生命尊重	＊身近な自然と関わる中で、自然の変化に気付き、「なぜ」「どうして」と友達と一緒に考えたり、調べたりするようになる。	＊自然の変化や現象に関心を持ち、その理由を調べたり、理解したりしようとする。
⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	＊友達と一緒に作ったものを数えたり、長さを比べたりして関心をもつようになる。 ＊相手が分かるように看板を作ったり、ルールを表示したりする中で文字を読んだり書いたりする便利さに気づくようになる。	＊文字を読んだり、書いたりする必要性に気付く。 ＊幼児期に数量や図形など生活経験で養われた感覚が、小学校の学習で実感に伴った理解につながる。
⑨言葉による伝え合い	＊自分が知っていることや経験したことを教師や友達に「伝えたい」と感じるようになる。 ＊自分の気持ちや思いを伝え、教師や友達が聞いてくれる中で、言葉のやり取りの楽しさを味わう。 ＊皆の前で自分の考えを伝えたり、分かりやすい話し方を工夫したり、友達の言いたいことを理解しようとする。	＊学習において、自分の考えを説明したり、友達と考えを共有したりする。 ＊自分の伝えたい目的や相手の状況などに応じて言葉を選んで伝えようとする。
⑩豊かな感性と表現	＊友達と一緒に遊びを進める中で、必要な衣装や道具を身近な素材や用具などを使って作り上げたり、音で動作を表したりするなど、表現する楽しさを味わう。	＊自分の気持ちや考えを一番適切に表現する方法を選び、自信をもって表現する。

4　一人一人のよさについて

(1) 一人一人のよさとは

新幼稚園教育要領の内容の取り扱いには次のように書かれている。

（２）一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際，集団の生活の中で，幼児が自己を発揮し，教師や他の幼児に認められる体験をし，自分のよさや特徴に気付き，自信をもって行動できるようにすること。

一人一人のよさとは、その子の持ち味や力、その子らしさである。一人一人のよさが生かされた集団を形成するためには、教師が幼児の心に寄り添い、幼児一人一人のよさを認めることが大切である（図５）。塚本(2018)は、「ありのままの自分が認められている安心感や保育者の温かいまなざしに支えられ自分のよさに気づき、自己肯定感がもてるようになる。」と述べている。協同遊びを通して、一人一人のよさが発揮され互いに影響し合い、相手のよさに気付いたり、認めたりすることで相手の思いやる気持ちも育つと考える。このように、個々の育ちは集団を高め、集団の育ちは個々を育てる。

図５　１０の姿の協同性の視点から幼児理解

(2) 本研究における発達の定義

本研究における発達とは、幼児が自ら主体的に環境と関わり、自分の世界を広げていく過程そのものを発達と捉える。教師は、幼児一人一人の発達の特性（幼児らしい見方・考え方・感じ方・関わり方など）を理解し、その特性や幼児一人一人が抱えている発達の課題に応じた指導することが大切である。また、幼児自身が自ら周囲に働きかけ、やりとりをしながら様々なものを身につけ、自ら育とうとする姿が重要である。「何ができる」という視点ではなく、発達はプロセスと捉え、後退したと思えるような葛藤やトラブルが幼児にとって重要な意味を持つのであると考える。

(3) 理論のまとめ

無藤(2018)は、「幼児期に育まれた協同性は、小学校における集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力し、意見を交わし合う中で新しい考えを生み出しながら工夫して取り組むなど､教師や友達と協力して生活したり学び合ったりする姿につながっていきます。「協同性」は、自分を抑えて仲良くするというより、子どもがそれぞれの力を発揮し合うことでより充実した学び合いをもたらす姿であると言えるのです。」と述べられている。幼児教育においても個の育ちなしには、集団の育ちは得られない。個と集団は別個にあるものではなく、共にあるものである。そのため、教師が幼児一人一人を理解し、育みたい視点を明確にすることで、一人一人のよさを生かす場を作ったり、個に応じた援助をしたりすることで協同性が育まれると考える。

5　協同性が育まれる年間カリキュラム（うるま市立幼稚園教育年間カリキュラムとうるま市内幼稚園アンケートの結果より抜粋）

期	Ⅰ期（4月～5月）	Ⅱ期（6月～7月）	Ⅲ期（9月～10月）	Ⅳ期（11月～12月）	Ⅴ期（1月～3月）
発達の過程	・教師とのつながりの中で安定していく時期	・気の合う友達との関わりの中で安定していく時期	・仲間意識が芽生え、友達と一緒に生活する楽しさを知っていく時期	・友達関係を深めながら、自分の力を十分に発揮して意欲的に活動する時期	・自分のよさを発揮し、目的をもって生活を進める時期
	居場所作り　他者との共感　自分の思いを伝え、相手の話を聞く　工夫したり、考えたり　共通の目的が実現する喜び				
ねらい	・園生活に慣れ教師や友達と好きな遊びを楽しむ。	・友達と関わる中で様々な感情を共感し、共通のイメージをもって取り組む楽しさを味わう。	・友達と遊ぶ中で自分なりに挑戦しようとする気持ちを持ち工夫したり考えたりして自分の力を発揮する。	・グループや学級の友達と一つの目的向かって取り組む楽しさや面白さを味わう。	・友達と共通の目的に向かって、協力して取り組み充実感や満足感を味わう。
遊び 室内	ままごと（個々の遊び） ブロック・積み木（個々の遊び） 椅子取りゲーム	ままごと（イメージの共有） ブロック・積み木 製作遊び	ままごと（役割分担） ブロック 製作遊び	お店屋さんごっこ（見立てて） お祭りごっこ 発表会ごっこ	郵便ごっこ 正月遊び 学校ごっこ
遊び 戸外	鬼ごっこ 砂場遊び 伝承遊び	鬼ごっこ 砂場遊び 色水遊び	ハンターごっこ（遊びの発展） 運動遊び		ハンターごっこ（集団） 運動遊び ボール遊び（集団）

発達に応じた幼稚園の遊びから小学校（生活科）の学びへ

教師の援助　幼児の姿　小学校生活科

１０の姿(1)健康な心と体(2)自立心(3)協同性(4)道徳性・規範意識の芽生え(5)社会生活との関わり(6)思考力の芽生え(7)自然との関わり・生命尊重(8)数量や図形、標識や文字などへの関心(9)言葉による伝え合い(10)豊かな感性と表現

入園当初は一人で遊ぶ幼児も多い。

幼児が周囲の友達の存在に気づき、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるように幼児同士をつなぐ援助をする。

(3)(4)(7)(9)(10)
友達と同じ空間、こと、ものに触れることで楽しさを共感し、話し合いや相手の考えを聞く。（伝え合い、共感）

幼児の気持ちを代弁したり、友達への思いの伝え方を知らせたりする。

(3)(4)(6)(7)(9)
試行錯誤、他児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わう。

砂場遊びや色水遊びで体験して得たことをもとに、工夫したり考えたり表現したりする。

(2)(3)(9)
自分の気持ちを素直に伝える。相手の話をしっかり聞こうとする。（思いやり、葛藤）

幼児の工夫など周りに伝え、認め受け入れ合える雰囲気を作る。

自分の得意なことを活かし遊びに取り入れる。（様々な気付き）

幼児同士が認め合い、遊びが深まるように話し合いの機会を作る。

(3)
共通の目的に向かって作り上げ、できた喜びや達成感を味わう。（自信、協力）

あさがおの栽培
世話する楽しさ、生命尊重→性質や成長の変化を知る
（興味・関心）　（学ぶ意欲）

色水遊び
色の変化に気づき楽しむ→発展的に展開する
（好奇心探究心）　（生活への関心を高める）

お祭りごっこ
友達と作る楽しさ→招待して楽しませる喜び
（充実感・満足感）　（自己有用感）

正月遊び
伝承遊びに親しむ→地域の人との関わり
（根気強さ）　（社会性）（伝統文化）

Ⅵ　指導の実際・仮説の検証

1　第１回検証保育までの取り組み

(1) 保育計画

時	月　日 保育活動	○ねらい	◎教師の援助 ☆環境構成	反省・評価
1	10 月 23 日(火) 導入 「うるま祭りクイズ」	○うるま祭りに関するクイズを通して、祭りに興味をもつ。	☆うるま祭りの写真を掲示しながら話をする。 ◎お祭りを連想させるようなクイズを出しイメージを膨らませる。	・お祭りに関するクイズをしたことでお祭りに行っていない子もイメージを共有することができた。 ・ルールや守って欲しいことを全体で共有する説明が不足していたため、次回から黒板に書き、ルールを振り返ることできるようにしていく。
2	10 月 26 日(金) ・お祭りに関する話し合い活動 「どんなお祭りにしたい？」 「いつお祭りをやる？」 「お祭り準備①」	○友達と話し合ったり、考えを出しあったりしながら一緒に作って遊ぶ楽しさを味わう。 	◎近くで遊ぶ友達や同じ遊びをしている友達の様子を見て、互いに刺激を受けることが出来るような場の取り方を工夫していく。	・全体でお祭りをやることが決定したが、興味をもっていない子から「絵を描く遊びをしたい」「製作上手じゃないからやりたくない」「違う遊びしたいからやりたくない」と消極的な意見がでた。個別に話をし、その子達のよさを引き出せるような遊びを展開していく。
3 （事例①）	10 月 29 日(月) 「お祭り準備②」 ・食べ物屋さん、ゲムなど自分が興味をもっている場所に行き製作する。	○友達とイメージを共有しながら、遊びを進めていく楽しさを味わう。 	◎お祭りに興味が無い子へは、その子が好きな遊びからお祭りに関する遊びへ繋げられるようにしていく。	・前時で興味を示さなかった子も、その子の興味をもっている遊びをお祭りごっこに取り入れることで興味を示し、「明日も続きやりたい」という声がでた。 ・グループの中にいるが、自分で何をしたらよいか見付けることができず他児の様子を傍観している子もいる。
4 （事例②）	10 月 30 日(火) 「お祭り準備③」 ・お祭りに必要な物を作る中で、足りないものに気付く。	○友達とイメージを共有しながら、遊びを進めていく楽しさを味わう。	◎教師が幼児のよさを認める声かけを周囲の友達に知らせたり、振り返りの際に紹介したりする。	・何をしていいか戸惑っている幼児の周りに材料を置き製作できる環境を整えたことで興味を示した。その作ったものを様々な場で紹介することで自信につながったようである。 ・教師が近くにいる友達との関係をつなぐ橋渡しをすることでアイディアを出し合う姿が見られた。
5	10 月 31 日(水) 「お祭り準備④」 ・明日のオープンに向けて必要なものを作る。	○お祭りごっこという共通の目的に向かって、互いに思いを伝え合ったり、役割分担したりして進める楽しさを味わう。	◎工夫したり、考えたりしている姿を認め、共通の目的が実現する喜びを味わえるようにする。 	・互いの考えを伝えたり、受け入れたりして作ることを通して、友達と一緒に遊ぶことの嬉しさや楽しさにつながったようである。 ・どのように工夫すると楽しくなるかグループで考える時間や声かけをすることで、会話が増えたり、相談したりする姿が見られた。しかし、自分の思いを通そうとする幼児の姿も見られた。
6 本時	11 月 1 日(木) 「２くみまつりオープン」 ・役になりきって遊ぶ。 ・必要な物を工夫したり、考えたりしながら作る。	○お祭りごっこという共通の目的に向かって、互いに思いを伝え合ったり、役割分担したりして進める楽しさを味わう。	◎子供のつぶやきや相手のよさを認める言葉を見逃さずに自分たちでお祭りを作り上げている過程を褒め、自信につなげていく。	・お客さんになる人、買う人と役割を決める際に一人の意見からすぐに答えをだすのではなく、オープンクエッションをしたことにより学級全体で考える姿が見られた。 ・一人一人のイメージを共有する話し合いの工夫や出店の配置など改善が必要である。

（2）検証保育までの事例

実践事例①　「明日も続きやりたい」　育みたい協同性の視点【①，②，⑥，⑦】

10 月 29 日（月）　【抽出児：S 児，A 児，Y 子】

【幼児の姿】

育みたい協同性の視点から個別に見ると、友達との関わりが少ない子が S 児、A 児、Y 子の３名である。その幼児たちの共通する課題は、「何をしていいかわからない」「やりたいことが無い」の２つであった。そこで、製作が得意な S 児の周りに教師が意図的に様々な材料や素材を置くことで興味を示した。

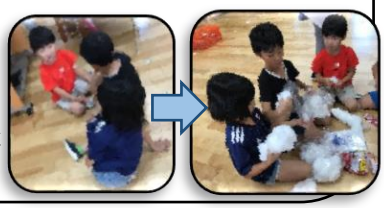
Y 子「わたあめみたい」と綿をみてつぶやいた。他の２人も興味を示し、触り始めた。

T「綿は白いからミルク味かな？」

A 児「色を付けていろんな味にしたい」と提案から絵の具を使用し色を付けて、わたあめを作り「わたあめ屋」がオープンした。

製作が得意な S 児はいろんな色を使い、様々な味を表現した。

片付けの時間になると、「明日も色をつけたい」と期待を膨らませる姿が見られた。



協同性の育ち	１０の姿
・友達と共通のものを作ることを通して，自分の思いを伝えたり，相手の話を聞いたり一つの材料から遊びが展開されることの楽しさを味わった。 ・綿を本物のわたあめに見立てて作るために，友達の動きを見て自分なりに取り入れる姿が見られた。 ・教師の言葉かけにより興味→遊びに変わり、自ら働きかける遊びへとつながった。 ・綿の分量と絵の具の分量を考えて色づけをしていた。	⑼言葉による伝え合い ⑵自立心 ⑶協同性 ⑹思考力の芽生え ⑽豊かな感性と感覚 ⑻数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

【次回の手立て】

共通の目的に向かう中で，自らやるべきことを見いだせない幼児に対して，友達との関わりを持ちながら一緒に遊びを進めることの楽しさや，自分で出来た達成感を味わえるように援助する。

実践事例②　「遊ばないで！！」　育みたい協同性の視点【①，②，③，④，⑤，⑥，⑦】

10 月 30 日（火）　【抽出児：A 子，B 子】

【幼児の姿】

お祭りオープンに向けて準備をしている中、自分で何をしていいかわからない A 子がくじ引きのダンボールを触っていると、B 子が「何もしないなら遊ばないで」と怒りをぶつけていた。A 子はどうしようもなくなってトイレに逃げ込んだ。教師がどうしたのか B 子に尋ねると・・・

B 子「自分達は頑張ってお祭りの準備をしているのに何もしないで遊んでいる」

T「B 子はお祭りに向けて準備頑張っているんだよね。でも、A 子悲しい顔していたよ。どうしたほうがいいのかな」

A 子が戻ってきて教師が仲介に入り互いの思いを受け止めた。何をしていいかわからない A 子にやり方を教えてあげるといいよと助言するも B 子は無反応。

そこで、友達の意見を聞き解決できるように、全体で話し合いをもち共有すると・・・

M 子「B 子は絵や字を書くのが上手だから教えてあげたら？」と提案が。少し考え、A 子に自ら話しかけ、やり方ややるべきことを教える姿が見られた。その後は、笑い合って作業し、A 子も自発的に参加する姿が見られた。

協同性の育ち	１０の姿
・友達との間の葛藤や、自分自身の中でのジレンマを乗り越える姿が見られた。 ・自分の得意なことを友達に認められている嬉しさを味わった。 ・相手に分かりやすく教え，難しいことは一緒に解決しようとしている。 ・友達からやり方を教えてもらい，自分がやるべきことを見いだす姿が見られた。	⑵自立心 ⑶協同性 ⑷道徳性・規範意識の芽生え ⑹思考力の芽生え ⑼言葉による伝え合い

【次回の手立て】

２組祭りのオープンに向けて、必要なものを作る中で、役割分担をして遊びを進められるようにする。また、完成していないグループに他のグループをみんなで助け合い、学級全体で同じ目的に向かう楽しさを味わえるようにする。

２　第１回検証保育指導案（平成 30 年 11 月 1 日〈木〉）

(1) 活動名　「待ちにまった２組祭りのオープンだ！」

(2) 活動設定の理由

①幼児の実態

本学級の幼児は、友達と一緒に戸外や室内で遊ぶことを通して、「一緒にいると楽しい」「新しいことがわかっておもしろい」と様々な感情を共有している。室内では、製作遊びを通して自分のイメージを表現したり、友達が作っているものをみてまねたりしてわからないところを聞く様子が見られる。前に述べた協同性のプロセスでいうと「自分の思いを伝え、相手の話を聞く」の段階であると捉えた。そこで、幼児たちが興味をもっているお祭りごっこを通して、一人一人が自己を発揮し、友達と工夫したり考えたりして協同して遊ぶ楽しさが味わえるのではないかと考え、検証を設定した。

(3) 幼児に育って欲しい協同性の視点

育みたい協同性の視点

①友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
②自分の思いを伝え、相手の話を聞く。
③互いの意見が違うことに気付き、受け入れる。
④自分の気持ちを調整して折り合いをつける。
⑤友達と一緒に工夫したり、考えたりする。
⑥自分の力を発揮し、友達のよさに気付く。
⑦一人ではできないことも友達と一緒ならできる楽しさを味わう。
⑧共通の目的が実現する充実感や満足感を味わう。

(4) ねらい　◎友達とお祭りごっこという共通の目的に向かって、互いに思いを伝え合い、工夫したり、考えたりしながら遊びを進める楽しさを味わう。

(5) 内　容　①気付いたことや困ったことを、友達に伝える。
②友達を認めたり、励まし合ったりしながら、遊びを進める。
③友達と共通の目的をもち、お祭りごっこを実現することを楽しむ。
④役割分担の必要性に気付く。

(6) 仮　説　共通の目的の実現に向けて遊ぶ中で、教師が一人一人の育ちを読み取り、育って欲しい点とその子に応じた援助や友達同士をつなぐ橋渡しをすることで、互いに思いを伝え合い、工夫したり、考えたりして遊ぶ楽しさを味わうことが出来るであろう。

(7) 環境構成

友達とのイメージ共有

お祭りごっこの取り組みを写真で掲示したり、つぶやきを書きとめたりして欠席していた幼児や保護者へこれまでの流れが伝わるようにした。

幼児が興味をもっているベイブレイドを様々な素材を使って作れる方法を教え、自分達で遊びを進められるようにした。

思いや考えの伝え合い

自分達で必要なものを考えることで活動の見通しや事前準備の必要性に気付くことができるようにした。

あまり自分を出せない子もその子の得意なことで自分の力を発揮できるように場を設けた。

(8) 本時の展開

時間	○予想される幼児の姿	◎教師の援助　☆環境構成 □育って欲しい１０の姿
10：00 10：20 10：40 10：50 11：00	○教師の話を聞く。 ・前時までの流れを振り返る。 ・本時の流れを確認する。 ・各グループに分かれて、開店の準備をする。 ○お祭りごっこを楽しむ。 ・ゲームの説明をしたり、商品を渡したりして、店員になりきって楽しむ。 ・役になりきり、やり取りを楽しむ。 ・友達と一緒に商品を工夫して作る。 ・同じ役に不満を持つ子がいる。 ・トラブルが起きるであろう。 ○片付け ・閉店の準備をする。 ・次も使いやすいように片付けを工夫する。 ○今日の活動の振り返り ・教師の話を聞く。 ・楽しかったこと、工夫したこと、困ったこと、気付いたことなど発表する。 ・もっと楽しくなるようなアイディアを出し合う。	◎前時までの流れを振り返り、本時の活動に期待がもてるようにする。 ☆本時の活動の流れを表示したり、見通しをもち遊べるよう話をしたりする。 (1)(8) ☆自分たちでお祭りごっこの準備が出来るように、出店場所を紙に書いて表示する。 ◎商品を売る人、友達と相談しながらお祭りごっこに必要なものを作る人、買う人などそれぞれが共通のイメージをもちながら、楽しんでいる姿を受け止め、一人一人の気づきや発見、工夫に共感し、認めていく。 (3) ◎役割交換の必要性に気付いた際には、一度集めてみんなで考え、どのようにしたらよいか話し合いの場を設ける。 (3)(9) ◎思い通りにいかずに葛藤している幼児にも寄り添いながら、相手の思いに気付けるように関わる。 ◎自分の思いを伝えにくい幼児も考えを伝えられるように仲介していく。 ◎一人一人のよさを伝えながら、一緒にお祭りを進める楽しさを味わえるような声かけをする。 (3) ☆必要なものを作る際に使う材料を用意しておく。 ◎進んで片づけをしている幼児を褒め、次も使いやすいようにするにはどのようにするか考えられるように声かけをする。 (2) ◎幼児たちが工夫した点や、これまで頑張ってきた点を認め、褒める声かけ自信につなげていく。 ◎困ったことを拾い、次はどうしたらよいかみんなで考える場を設ける。 (9)
評価	・自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたり出来たか。 ・友達と一緒に工夫したり、考えたりして協力する楽しさを味わうことが出来たか。	

① 仮説の検証（検証保育Ⅰ）

ア 本時での学級全体の様子

「待ちに待った２組祭りオープン」　育みたい協同性の視点【①，②，⑤，⑥，⑦，⑧】

テーブルが必要だと気付いたＡ児が一人で持っていると、見かけたＲ児が助けに入り、一緒に力を合わせて運んでいる。その後、周りにいたＹ子も手伝う姿が見られた。

開店前の準備では、それぞれ自分なりに必要なものを見つけて考えて作ったり、用意したりする姿が見られた。

２組祭りを進めていると、役割を決めていないグループもあり、店員がいない出店が見られた。

教師の援助
- 売る人、買う人、作る人と幼児同士のお祭りごっこのイメージが共有できておらず、店員とお客さんがいないという状態があったため、役割分担の必要性に気付けるように全体を集め共通確認をする。
- 実際に、役割分担しているグループの考えを取り入れ全体で役を決める必要性に気付けるようにする。

T:「わなげチームは店員がいなくて友達が困っていたけどどうしたほうがいいのかな」
M 子:「お買い物を交換ずつやっているよ」
T:「自分達で決めたの？」
M 子:「K 子が二人ずつ交代で行こう教えてくれたよ」
S 児:「じゃあ、リーダー決めてやってみよう」
その考えに全体が賛同し、各グループ自分たちで相談し売る人・買う人と役割を決めていた。そして、再度お祭りごっこを再開すると、今までずっと店員をしていた子も他の出店に行き好きなものを買ったり、ゲームを楽しんだりする様子が見られた。

先ほど店員がいなかったわなげチームも、役割分担し、役になりきって遊ぶ楽しさを味わう姿が見られた。

何のお面にしますか
10 円でも 100 円でもいいですよ

ありがとうございます

【振り返りの場面】

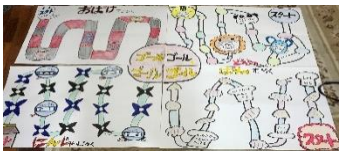
- Ａ子と一緒に買うことができて楽しかった。
- ベイブレイドチームは自分達で作る人・買う人・売る人と決めた。
- 次は、すみれ組（４歳）と１組も呼びたい。（発展的な意欲）

全体で活動を振り返ることで、みんなに楽しかったことを伝えたり、相手の話を聞いて共感したりする姿が見られ、「話す、聞く、伝え合う力」総合的に育まれようとしている。また、次への課題を出し合い、より面白くなるように考えることで発展的な意欲と態度につながったようである。

協同性の育ち	１０の姿
・気付きや感覚、思いや考えを教師や友達に伝え、共感してもらえることにより、自分を受け入れてもらえた嬉しさを味わった。 ・友達の考えを聞き、受け入れることで共感し合い、遊びに発展が見られた。 ・友達と一緒にお祭りごっこを進める楽しさを味わい、役割分担をすることでより遊びが楽しくなることに気付く姿が見られた。 ・これまで関わりが少なかった幼児同士が、一つの目的の実現に向ける過程で会話を楽しんだり、相手のよさを見つけたりすることで一緒に遊ぶことの楽しさを味わった。	(2)自立心 (3)協同性 (4)道徳性・規範意識の芽生え (6)思考力の芽生え (9)言葉による伝え合い

３　第２回検証保育までの取り組み

（1）保育計画

時	月日・活動名	○ねらい	◎教師の援助☆環境構成	反省・評価
1	1月 15 日(火) 「グループを決めよう」	○たくさんの友達と関わる楽しさを味わう。	☆様々な子と関わりをもつことができるように「ドキドキくじ引き」を用意する。	・「ドキドキくじ引き」でグループを決めたことで、様々な子と関われるきっかけとなった。
2 事例 ①	1月 16 日(水) 10:45~11:30 「正月遊びスタンプラリー」	○正月遊びに興味をもち、楽しさを味わう。 ○グループで取り組む楽しさを味わう。	◎ルールや遊び方をみんなが楽しめるように工夫する。 ☆かるた、おてだま、すごろくの３つを取り入れる。その際に、すごろくは教師が事前に作り用意する。 	・手作りすごろくを用意したことで、幼児の興味を引き、「自分たちも作ってみたい」とつぶやく姿が見られた。 ・６つのグループの内５つのグループは力を合わせて３つクリアーしたが、１つのグループは勝ちたい思いが強く、ルールを自分の思い通りに変えたり、順番を決める際に「一番になりたい」と主張したりしてトラブルが多々見られた。教師によるルールの周知や互いの思いを汲み取る援助が足りなかった。
3	1月 17 日(木) 10:30~11:45 話し合い活動 ・巨大すごろくの設計	○グループで相談して巨大すごろくを考え、作ることに期待をもつ。	◎グループ内でトラブルがおきた際には、互いの思いを聞いて汲み取り、どのようにしたらよいか一緒に解決案を考える。 ☆巨大すごろくの設計するイメージが浮かびやすいように見本を用意する。	・グループに分かれて巨大すごろくの設計を行うが、自己主張の少ないグループはなかなか設計することができず他の遊びに興味を示す姿が見られた。 「自分たちで相談して」と声かけだけでなく、教師が書きやすいように見本を提示したり、ヒントを与えたりすることで設計が進み完成する喜びを味わった。
4 事例 ②	1月 18 日(金) 10:45~11:30 「巨大すごろくを作ろう」 	○グループの友達と一緒に工夫したり、考えたりして巨大すごろくを作る楽しさを味わう。	◎友達とのトラブルが生じた場合は、自分たちでどう解決いていくのかある程度見守りながら必要に応じて仲立ちをする。 ◎グループで話をして遊びを進めている様子を見守ったり、時にはヒントを与えたりする。	・話し合い活動において教師の言葉かけや発問の仕方に課題があり意図が伝わらず幼児の戸惑う姿が見られ、思うように巨大すごろくが作れなかった。 ・幼児同士のイメージが異なり、前時の巨大すごろく設計を活かすことが難しく課題が残った。計画を再構成し、場の使い方や時間配分、援助の工夫を図っていく。 ・職員間の保育反省を通して、何が育っているのか、何を育てたいのか振り返りを持つことで視点が明確になった。
5 ・ 6 事例 ③	1月 21 日(月) 10:00~11:20 (3 グループ) 1月 22 日(火) 11:00~14:00 (2 グループ) 「巨大すごろくを作ろう」	○グループの友達と一緒により面白くなるように工夫したり、力を合わせたりして作ることを楽しむ。	☆各グループが設計した図をもとに幼児がイメージしやすいように拡大する。 ◎友達と工夫したり、相談したりすることを通して、自分の思いを伝える大切さや相手の話を聞いて多様な考えがあることに気づかせるようにする。	・遊戯室という広い空間で５グループ援助することに課題があり３グループと２グループに時間や日にちをずらすことで、グループ一人一人の思いを汲み取り幼児同士の橋渡しをしたり、幼児一人一人のよさを引き出しながら一緒に作ったりすることで力を合わせて作る様子や、思いを伝え合いながら作ることを楽しむ姿が見られた。
7 本 時	1月 23 日(水) 9:30~10:20	「巨大すごろくで遊ぼう」 別紙参照		

（2）自己肯定感を高める環境構成

「すてき！はっけんき」

友達の素敵なところ、いいところ、すごいなと思うところを聞き表示することで、自分のよさを知ると同時に、友達のよさに気付くことへとつながり、自己肯定感を高める手立てとなった。

(3) 検証保育までの事例　「忍者グループの変容」

幼児の実態		育って欲しい姿
A児	自分の思い通りにことを進め、相手を受け入れようとしない。	自分の気持ちを調整し、折り合いをつけてほしい。
B児	いい考えを持っているが発信せず、違う遊びに移ることがある。	自分の考えを伝え、友達と一緒に最後までやり遂げようとする気持ちを、もつ。
C児	自分の思いを伝えようとする姿が見られるようになっている。	友達と力を合わせた充実感や満足感を味わう。
D児	自分の考えを伝えず、自分のイメージで黙々と進めようとする。	グループの友達と協力して遊びを進める楽しさを味わって欲しい。
E児	相手を受け入れる姿勢をもつようになってきている。	発想のよさをグループの友達に伝え、活かして欲しい。
A子	自らやりたいことを見つけることに時間がかかる。	グループの友達と一つのことに取り組む楽しさを味わって欲しい。

実践事例① 1月16日（水）「先に取ったよ」育みたい協同性の視点【①，②，③，④】

「正月スタンプラリー」のかるたに挑戦した忍者グループ。初めは読み手（リーダー）の話を聞いていたが、最後の一枚をめぐってトラブルが生じた。先に取りたいA児がカードの真上に手をかざし、すぐかるたに手を触れられる位置に用意していた。そのため、先にカードに触れたが、遅れて手を置いた読み手以外の４人から不満がでた。

C児、E児　「カードの近くに手をおくのはいんちきだよ」
A児　「でも、先にカードに触ってみんながその上に（手）を置いたのだよ」
E児　「違うよ、D児とA児は同時だったよ」（C児もE児の言葉にうなずき賛同）
A児は手で耳を塞ぎ意見を聞こうとせず、「A児が先に取った」と譲らない。
B児　「リーダー（読み手のA子）がどうするか決めて」
教師　「A子はどう思う？」
A子　「じゃんけんしたほうがいいと思う」
その意見に納得したA児。そして、じゃんけんをするとA児が勝ち最後のカードを受け取ったが不満な表情を見せる４人。その表情を見たA児は２番目にじゃんけんで勝ったC児にカードを譲る様子が見られた。一人一人の勝ちたい気持ちが強く、自分の思うようにルールを作り周囲に周知していないことでトラブルが生じた。その際に、教師がその場で互いの思いを汲み取ったり、困っていることの状況を整理して全体で共有したりできるような配慮が足りず、納得行かない幼児の姿が見られた。この事例から幼児同士の思いを受け止めながら、一緒に解決方法を考えたり、互いのイメージを共有したりする援助の工夫が必要であると感じた。

実践事例② 1月18日（金）「ゴールまでつなげよう」育みたい協同性の視点【①，②，③，④，⑤】

幼児の姿と言葉	教師のねらい　◎援助　◇読み取り
巨大すごろくの製作途中、ビニールテープでマスを作るA児に対し、新聞紙で剣を作りつなげようとしているD児。両者ともいい考えを持っているが、思いを伝えず自分の世界で黙々と進めるため、力を合わせることが少ない。	一人で黙々と進めるのではなく、グループの友達に自分の考えを伝えたり相手の思いを聞いたりして一緒に進める楽しさを味わってほしい。
D児　伝えてないよ	教師　D児の考えいいね。同じグループの友達にも伝えたの？
再び、黙々と作り始めたD児。 D児を認め褒める声かけをすると、A児とB児のところへ行き、	
D児　剣を合体して大きい剣を作ってゴールまで伸ばしてみよう	教師　素敵な考えだから、友達に伝えると忍者グループのすごろくがもっとよくなると思うよ。
D児が話をしている間、静かに聞くA児とB児。話終えたD児に A児　いいよ B児　いいね、いいね。やろう D児　早くゴールまで伸ばそう	◎幼児同士伝え合いをしている場面を見守る。
	◇D児の思いを受け止めた２人を教師が認めることで友達のよさに気付き、互いに受け入れあって製作していた。
D児が作った剣をA児とB児がつなげてセロハンテープでとめるなど、３人で力を合わせる姿が見られた。 	◇これまでのA児とD児は、自分のイメージで作り周りの考えを取り入れることが少なかったが、相手を受け入れることでより遊びが楽しくなることを味わう姿が見られた。

実践事例③ １月 22 日（火）「誰か手伝って」育みたい協同性の視点【①，②，③，④，⑤，⑥，⑦】

【抽出児Ａ児、Ｄ児】

巨大すごろくの問題を書いていたＤ児。しかし、「８ますすすむ」という文字が書けず、困っていた。
教師「Ａ児は字を書くのが得意だよ」
Ｄ児「誰か手伝って」と抽象的にいうＤ児に対し、教師が「名前を呼ぶと手伝ってくれると思うよ」を助言すると、
Ｄ児「Ａ児手伝って」
Ａ児「いいよ。簡単！」と自分の作業の手を止め、手伝う様子が見られた。
その後、２人で問題を完成させ、他の友達を手伝い、力を合わせることで自分たちの巨大すごろくを作り上げることができた。

事例を通してＡ児の学びと育ち
・１０月の頃は、Ａ児の思いを周りが受け入れていたが、３学期になり仲間意識の強まりから、互いに自己主張をし合える関係や物の見方が変わりトラブルが多くなった。自分の気持ちを伝えることが苦手だったり、自分の気持ちを整理して折り合いをつけたりすることが苦手なＡ児。教師が幼児の思いを受け止め、相手の気持ちや表情に気付く声かけや他児との橋渡しをするなど様々な葛藤体験を重ねることで、少しずつ相手の考えを受け入れようとする気持ちが芽生えた。

４　第 2 回検証保育指導案（平成 31 年 1 月 23 日〈水〉）

(1) 幼児の実態

様々な遊びや活動を通して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、自分の思いを伝えることが増えてきている。新学期になり、友達を誘ってすごろくやかるたなど正月遊びに興味を示している。しかし、自己主張が強く、自分のルールで遊びを進めるため共通の理解が図れずトラブルが起きる。そこで、今回の検証では、「巨大すごろく」を作ることを通して、互いに意見が違うことに気付き、受け入れたり、自分の気持ちを調整し折り合いをつけたりすることができるようにしていく。また、トラブルが起きた際には、どのようにするとよいのか幼児同士で解決できるようにしていく。その中で自分の力を発揮しながら、友達のよさに気付き協同して遊ぶことができるであろうと考える。

(2) 仮　説

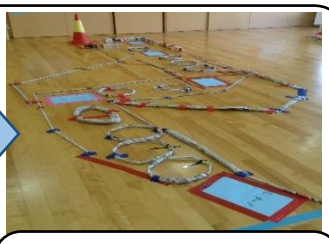
学級での活動を通して、教師が幼児同士のイメージの共有を図る話し合い活動を取り入れたり、自分の気持ちを調整し折り合いをつけたりするための援助を工夫することで、協同して遊ぶことができるであろう。

(3) ねらい　◎自分の思いや考えを言葉で伝え合い、グループの友達と目的を共有しながら巨大すごろくを楽しむ。

(4) 内　容　① 自分の思いや考えを伝え、相手の話を最後まで聞く。
② 自分の気持ちを調整し、折り合いをつける。
③ ルールや順番を守って遊ぶ。
④ 文字や数字、図形など遊びに取り入れる。
⑤ 自分たちで作った巨大すごろくで遊ぶ楽しさを共有する。

(5) 環境構成

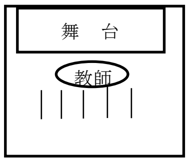
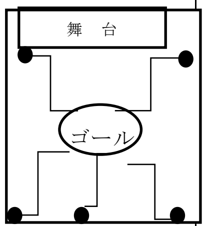
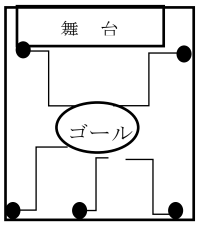
グループ全員がイメージしやすいように、幼児たちが書いた巨大すごろくの設計図をもとに、マスと同じ枚数の画用紙を並べ写真で示した。



設計図や実物化した見本を参考にマスの数を合わせたり、問題を書いたりしていた。

各グループ個性豊かな問題を考えていた。

(6) 本時の展開

時間	予想される幼児の姿	◎教師の援助　□育って欲しい 10 の姿	☆環境構成
9:20 9:30 9:45 10:05 10:10 10:20	○遊戯室へ移動する。 ○教師の前に集まる。 ・歌を歌う。 ・前時の活動の流れを思い出し、課題点について話し合う。 ・本時の流れを確認する。 ・ルールの確認をする。 ルール１．２人ペアーになる。 ルール２．教師の合図でさいころを振る。 ルール３．ゴールは統一する。 ルール４．１ペアーでもゴールしたチームの勝ち。 ○巨大すごろくスタート ・各グループ自分たちで作ったすごろくで遊ぶ。 ・他のグループにすごろくで遊ぶ。または、新たなルールを考えて遊ぶ。 ○片付け ・使ったものを元の場所に戻す。 ・片づけ終えたグループは教師の前に集まる。 ○振り返り ・楽しかったことや困ったことを発表する。	☆サイコロを振る人、コマになる人と見分けがつくように衣装を準備する。 ◎前時の活動を思い出し、困ったことを話し合うことで、ルールを変えたり、新しいアイディアを取り入れたりして工夫するおもしろさに共感していく。 (3) (9) ◎全体で巨大すごろくのルールの確認をする。 (4) ◎活動の範囲が広がっているので、安全面には十分配慮し、教師も一緒に遊びを楽しむようにする。 ◎各グループのよさや頑張っている点を教師が声に出して表現することで友達のよさに気づくことができるようにする。 (3) ◎いざこざが起きた際には、教師がそれぞれの思いを受け止め、困っていることの状況を整理して幼児に伝える。 (3) (9) ◎幼児が友達と一緒に思いや考えを出し合いながら遊びを進める様子を見守り、必要に応じて援助する。 (3) (6) (9) ◎自分たちが作った巨大すごろくで存分に楽しむことができるように声をかける。 (3) (8) (10) ◎みんなで動くことによる楽しさや触れ合いを感じ、友達とつながりを深め、友達のよさに気づけるような声かけや援助をする。 (1) (3) ◎振り返りでは、各グループの頑張ったことや困ったことなどを取り上げ、明日への遊びへつながっていけるようにする。 (9) ◎発表の場で幼児が伝えたい思いをくみ取り、必要に応じて言葉を添える。 (9)	【遊戯室】 ☆カセットデッキ ☆CD  ☆ビニールテープ ☆ガムテープ ☆マジック ☆画用紙☆新聞紙  ※●はスタート位置 
評価	・グループで相談したり、考えたりしながら遊びを進めていたか。 ・自分たちで作った巨大すごろくを存分に楽しむことができたか。		

① 本時の学級の様子 育みたい協同性の視点【①，②，③，④，⑥，⑦，⑧】

【ア ルールの確認】

説明の際に幼児をモデルとし動作化したことで、イメージを共有することにつながった。

【イ 巨大すごろくで遊ぼう】

グループ名に合った衣装を準備することで幼児の意欲が高まった。さらに、サイコロを振る人、こまになる人と見分けがつくようにしたことで戸惑う様子なく楽しむ姿が見られた。

【ウ 新たにルールを考え、全体で共通確認】

他のグループの巨大すごろくで遊んでほしいという教師の思いから提案すると、反応があまり無い・・・
しかし、Ａ児が新たなルールを考えそれを伝えると、みんなが賛同した。

【エ 新しいルールで再スタート】

全体で共通理解を図り再度巨大すごろくを展開した際には、流れを把握しているためさらに盛り上がり、飛び跳ねるなど楽しさや嬉しさを全身で表現する姿も見られた。

【新しいルールの発案時の考察】
教師の思いと幼児の思いが食い違い、話し合い活動で教師の思いが伝わらない。その原因は、幼児が自分たちで作った巨大すごろくで遊ぶことに満足していないからであった。教師の幼児理解の見とりの甘さに課題がある。しかし、幼児の反応を見てＡ児のつぶやきを拾いルールを提案したことで、より遊びが発展するきっかけとなった。

【オ 振り返りの場】

Ａ子：巨大すごろくみんなでやって楽しかったです。
Ｂ子：勝てなかったから悔しかった。
Ｃ子：他のグループが勝ったけどまたみんなで作ってやりたい。
Ｄ児：負けたけどみんなで巨大すごろくできてよかった。
Ｅ子：Ｒ児の声が大きくて先生の合図が聞こえなかった。でも周りを見て気付いた。（困り感を発表できる雰囲気があった）

【学級全体の考察】
○巨大すごろくを通して、勝ったチーム、負けたチームもあるがみんなで一つの目的に向かい力を合わせた経験や教師や友達と一緒に過ごす喜びを味わうことができた。
○今回の活動で、葛藤、勝敗、悔しい、よかった、助け合う、頑張れと励ます気持ち、やったという気持ちなど体験し自分で気持ちを調整することができた。
▲友達とのつながりや一体感を生むルールを考えるなど援助が必要である。

(7) 事例「互いの思いが異なりトラブル発生」（抽出グループ：忍者グループ）

２人１組になり、一人がサイコロを振る人、もう一人はコマになる人と役割を決めて巨大すごろくがスタートした。同じペアーのＡ児とＤ児であるが、自分達で作ったマスの数え方が異なり、思いの食い違いからトラブル発生。サイコロの５の目を出したＡ児、しかし、Ｄ児は４マス進み意見が異なる２人。

幼児の姿と言葉	教師のねらい　◎援助　◇読み取り
Ａ児　やった５がでた ５という数字に喜び、Ｄ児に伝えるＡ児。 Ｄ児　１、２、３、４、５　（マスを数えながら歩く） Ｄ児の立っている場所に違和感を覚えＡ児も、スタートから数え始めた。 Ａ児　そこじゃないよ。ここだよ。 マスの位置を教えるＡ児。しかし、 Ｄ児　違うよ、ここだよ。あっているよ。 Ｄ児も再びスタートの位置から数え始め両者とも一歩も譲らず、意見の食い違いからトラブルが生じた。 教師が両者の考えを代弁すると、 Ａ児　（マスが大きいから２歩歩けると）勘違いしていた。 罰が悪そうな表情を見せるＡ児だったが、教師が受け止めたことで、笑顔になり気持ちを切り替えることができた。	相手の話を聞いて、受け入れてほしい。 ◎マスの大きさによる数え方の違いにより、意見が異なっているので互いの気持ちを受け止め、その思いを両者に伝えていく。 教師・・・Ａ児の思いを聞き、汲み取り言葉にして伝える。 次に、Ｄ児の思いを聞き、汲み取り言葉にして伝える。 教師　Ａ児は、マスが大きいから一つのマスだけど、２歩と数えたんだね。 教師　Ｄ児は、マスは大きいけど一つのマスだから一歩と数えたんだよね。 ◇教師が互いの思いを聞き受け止め、伝えたい思いを整理し伝えることで、納得したＡ児の様子が見られた。 教師　マスが大きいから２歩歩けると思ったんだね。 ◎Ａ児の思いを受け止める。

～巨大すごろくを通して～　協同性の育ち	１０の姿
・トラブルを通して、すぐには自分とは違う考えを受け入れることができず、心が揺れるが、相手の気持ちに気づくことができるようになってきている。 ・巨大すごろくを通して、「順番を守る」「日頃、遊びを共にしない子と関わり、教え合い助け合える」「遊びの中から自分達で新たなルールを考え、伝え合い受け入れる」など心が一つになる体験を得ることにつながったようである。 ・準備から片付けまでの中で、友達同士助け合い、教え合い、伝え合いなど場面が見られた。	(3)協同性 (4)道徳性・意識の芽生え (6)思考力の芽生え (9)言葉による伝え合い

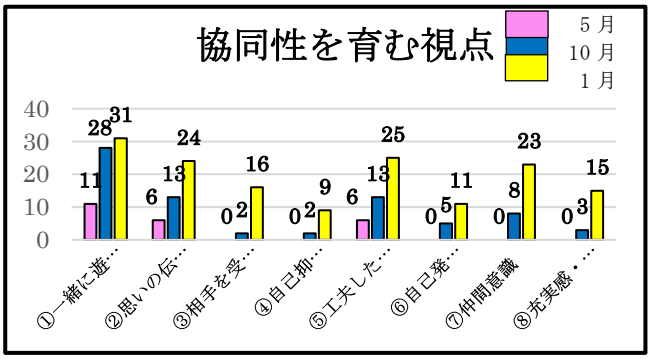
(8) 幼稚園の活動（巨大すごろく）と小学校（生活科：おもちゃランド）との共通点・相違点

	巨大すごろく	おもちゃランド
共通点	・友達と共通の目的をもち、協同して活動する楽しさを味わうこと。 ・様々な素材や材料を活かし、使える方法を考え、友達と一緒に工夫したり、考えたりする。 ・繰り返し、試行錯誤する活動を設定し友達との関わりを深める。	
相違点	・正月遊びのすごろくから興味をもち、遊びこむ。 ・遊びこみ、自分たちのすごろくを作ってみたいという気持ちが芽生える。 ・少人数の友達と空き箱や牛乳パックなどの身近な素材を使って工夫したり、考えたりして作る。 ・完成したもので遊び、満足感を味わう。	・仲間と協力して、人を喜ばせる。 ・身近な素材や材料を自分たちで集め、性質に気付き、取り入れる。 ・幼稚生との交流を通して、頼られる喜びや自分達が作ったもので楽しんでもらえた自己有用感を味わう。

(9) 仮説の検証まとめ　基本仮説：協同しながら、一人一人のよさを発揮することができたか。

本研究において、「協同性を育む視点」を用いたことで、何が育っているのか、何を育てたいのかという視点が明確になった。協同性が育まれる発達や時期などの過程を認識したことで保育の展開や援助の工夫の手立てとなった。

右記の結果から教師が発達や時期に即した関わりや友達同士をつなぐ橋渡しをしたことで一人一人がよさを発揮しながら、協同して遊ぶことができたと考える。しかし、「④自分の気持ちを調整して折り合いを付ける」では、個々の発達段階の影響もあり、トラブル等が少ない点もあった。そのため、教師がトラブルを生じた際に、互いの思いを汲み取り、整理して伝えたり、幼児同士で解決しようとしている姿を見守ったりする援助が今後も継続的に必要であると感じる。



Ⅶ　成果と課題

1　成果

(1) 理論研究で協同性を育む視点と様々な１０の姿との関連性を捉え深め「つなぎ愛シート」を作成したことで、幼児理解を図る手立てとなり、幼児の興味・関心を捉えた遊びの展開や環境構成・援助の工夫、年間計画の立案につなげることができた。

(2) 幼児の興味関心から遊びを広げる掲示物や材料を用意することにより、幼児の「やりたい」という意欲の高まりから友達と一緒に工夫したり考えたりすることにつながった。

(3) 友達と共通の目的に向かって遊ぶことを通して、一人ではできないことも友達とならできるということに気付き、一人一人のよさが遊びの中で発揮されていた。

(4) 幼児期の終わりまでに育って欲しい１０の姿と小学校の学びの連続性を表に示したことにより、学びの連続性を意識して発達に応じた保育を展開するきっかけとなった。

2　課題と対応策

(1) 幼児の思いと教師の意図をどう重ね合わせるか考え計画的な環境構成・援助の工夫が必要である。

(2) 幼児の言葉を引き出す話し方や話し合い活動の組み立て方の工夫を図る。

(3) 幼児の自己主張と自己抑制のバランスを今後研究し、より協同性を深めていく。

(4) 幼稚園の遊びと小学校（主に生活科）の学びの連続性をより深めていく。

〈参考文献・引用文献〉

文部科学省　平成 30 年 3 月　「幼稚園教育要領解説」　フレーベル館
文部科学省　平成 29 年 7 月　小学校学習指導要領　生活編
無藤隆　平成 30 年 9 月　「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」　東洋出版社
無藤隆　平成 24 年 6 月　「幼稚園教育要領ハンドブック」　学研
塚本美知子　平成 30 年 5 月　「対話的・深い学びの保育内容人間関係」　萌文書林
兵庫県教育委員会　平成 29 年 3 月　「幼児期と児童期の学びをつなぐ～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿～」
国立教育政策研究所教育課程研究センター　平成 17 年 2 月　「幼児期から児童期への教育」　ひかりのくに
中坪史典、香曽我部琢、後藤範子、上田敏丈　「幼児理解から出発する保育実践の意義と課題」(2011) 17、84－85